

教育研究創発国際研修における学術活動報告書

令和 5 年 2 月 23 日

氏名 大國 七歩

所属 比較教育社会学 コース

指導教員名 額賀美紗子教授

1. 研究課題 在日ネパール人 1.5 世のライフコース形成過程:学校文化を通じた適応と達成
2. 計画する学術活動の実施期間 令和 5 年 1 月 24 日 ~ 令和 5 年 1 月 24 日
3. 日本学術振興会特別研究員 (DC) の現在の採用状況 DC1 DC2 採用無し
4. 計画する学術活動の財源
 - 研究科教員の研究プロジェクト
 - 研究科・附属センタープログラムによる
 - 日本学術振興会特別研究員 (DC)
 - 研究科外の奨学金または自費
 - その他
5. 学術活動
 - 国外 国内
 - ①英語論文公表
 - ②研究科教員の研究プロジェクト参加
 - ③フィールドワーク
 - ④国際会議 (研究発表 運営補助 出席のみ)
 - ⑤研究会 (研究発表 運営補助 出席のみ)
 - ⑥研究指導委託
 - ⑦留学
 - ⑧国際研修
 - ⑨国際インターンシップ
 - ⑩その他 (具体的に:)

5. 学術活動実施の概要

※上記4で選択した学術活動について具体的に記載してください。括弧内の概要を必ず記載してください。

- ① 英語論文公表
(著者、発表論文名、掲載誌名等、発表年月巻号、発表年月日等、論文内容の概要)
- ② 研究科教員の研究プロジェクト参加
(プロジェクト名、代表研究者名、自身の具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、プロジェクトの概要)
- ③ フィールドワーク
(調査先機関等、国名・都市名、具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、調査先の概要)
- ④ 国際会議
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、学会・会議名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑤ 研究会
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、研究会名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑥ 研究指導委託
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究、研究テーマと受入教員、受入期間(年月日)、具体的な研究活動、研究発表内容等の概要)
- ⑦ 留学
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究科、受入期間(年月日)、具体的な履修状況、研究発表内容等の概要)
- ⑧ 国際研修
(プログラム名、派遣先機関、国・都市名、派遣期間(年月日)、プログラム概要、研究発表内容等の概要)
- ⑨ 国際インターンシップ
(プログラム名、派遣先機関、配属部署、国・都市名、派遣期間(年月日)、具体的な活動、プログラム内容等の概要)
- ⑩ その他(具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度等の概要)

学術活動区分 (①～⑩を記入)	⑤ 研究会
<p>研究発表</p> <p>研究会名: 東京大学現代日本研究センター (TCJS) Graduate Student Forum</p> <p>国・都市名: 日本・東京(オンライン開催)</p> <p>発表題目名: Likable and Not So Much: How Japanese school values affect immigrant students</p> <p>発表形式: 口頭(英語)</p> <p>年月日: 2023年1月24日</p> <p>概要: 生徒のエスニシティが多様化した定時制高校において、教員が移民背景を持つ生徒をどのような観点で捉えているかを明らかにし、さらに、日本語能力の低さを「言い訳」にする「ずるさ」という生徒認識や、日本語能力が高い生徒の困難の「やる気」への矮小化といった評価について論じる。これらにより、日本の教員文化に基づいて移民背景を持つ生徒が認識・評価されていることを指摘するほか、国ごとのステレオタイプを明らかにする。</p>	

- (注) ① 年月日は西暦で記入してください。
 ② 英語論文発表については報告する学術活動において発表又は受理されたもの。
 ③ 上記に記載しきれない場合は、ページを追加しても差し支えありません。
 ④ 複数回の学術研究活動による報告の場合、適宜本ページを追加し、2つ目以降についても必要な内容を網羅してください。

6. 学術活動による成果

※報告する学術活動について、教育分野における国際的リーダー人材の育成とその研究成果を海外に発信することを目的とした教育研究創発国際研修の趣旨に照らし、その成果を具体的に記載してください。学術活動により得られた自身の研究課題につながる成果についてもわかるように記載してください。

※本欄に書ききれない場合、ページを追加しても差し支えありません。

本学術活動によって、生徒のエスニシティの多様化への対応という教育の現代的な課題について、修士論文『移民背景を持つ生徒に対する教師のまなざし・評価の形成—一定時制高校における質的研究—』の調査で得られた知見を、日本の学校文化・教師文化という視点から検証しなおし、教師の無自覚な権力性・ジャパニーズネスに注目して問題点をより鮮明にする形で発表することができた。参加者から多くの質問・コメントを受け、学術的に興味深い分析および対象・視点だと評価されたと言える。

本学術活動は申請者にとって、英語による研究発表の計画・準備・実施の訓練の機会になった。また、質問・コメントを受けて回答することで、分析や対象について異なる角度から考えを深める機会を得た。これは、現在の研究「在日ネパール人1.5世のライフコース形成過程:学校文化を通じた適応と達成」の遂行に大いに役立つものである。さらに、東京大学現代日本研究センターおよびその構成員との関わりを初めて得ることができ、これは今後の調査や研究の拡大や質の向上、発表機会の増加に寄与すると考えられる。